１　明治のはじめころ

○　寺小屋

江戸時代の終りころから明治のはじめにかけては、三宅町の蓮性寺、西福寺、長音寺、徳居町の真照寺・光照寺のおばうさんが、お寺のお堂で、習字や、本の読み方やそろばんを教えました。このころはおもにお寺で学習しましたから、学校といわず寺小屋といいました。

合川ではこのほかおいしゃさんであった三宅の杉村左善さんや、代診の伊藤連さんや、徳居の後藤徳之進さんの家でも、同じように読み、書きなどを教えました。

しかし、寺小屋で学習した人はわずかでした。

寺小屋

寺小屋は、　寺のおぼうさん、神社のかんぬしさん、おいしゃさんたちが先生になって、子どもに読み、書き、そろばんなどを教えたところです。町民や農民の子どもが学習しましたが、今の習い屋です。

寺小屋は、江戸時代の中ごろからさかんになりましたが、これは商業や工業が発達して、学問がひつようになったからです。

ふつう５才か６才で寺小屋にはいり、３年から７年ぐらい学習して、11～12 才で卒業しました。

○　三宅学校

今から 100 年ほど前の明治５年(1872 年）に、明治の政府は、外国に負けないように国の力を強くし産業をさかんにするためには、まず、国民を教育しなければならないと考え、全国の町や村に学校をつくることにしました。

この国の考えにより、そのころの三宅村（今の三宅町)、徳居村（今の徳居町)、長法寺村（今の長法寺町)、３ケ村の人が、明治 8 年(1875 年)11 月 19 日に、今の運動場のま上にあった輪聖寺のくり(お寺の人が住むところ)や、お堂(開山堂)を学校と決め、三宅学校と名づけました。

これが合川地区での学校のはじまりで、この学校のはじめられた 11 月 19 日を、毎年学校創立記念日としています。

開山堂

開山堂は、東山の山上にあった輪聖寺のお堂でした。輪聖寺は、明治のはじめ、はい寺になり、おぼうさんがいなくなりました。それで、輪聖寺のくりは三宅学校、明導学校の三宅分教場、簡易科授業所、合川尋常小学校の校舎として 30 余年使われました。

ところが、明治 30 年から 40 年に木造校舎が建ったとき、開山堂は運動場の西南の近くに移され、くりはとりこわされました。

国師は三宅町に生まれ、小さいときから仏門に入り、僧としての修業をつみ、正中 2 年（1325 年）後醍醐天皇の招きで、京都南禅寺の住職となり、国師の称号をいただきました。　北条高時、足利尊氏とも交わり天龍寺を開き、当時の政治、文化の向上に努力しました。

無窓国師像

輪聖寺の本ぞんとして、開山堂にまつられていましたが、昭和 49 年、京都の弘源寺へ移されました。

産湯の井戸

○　学校の制度

明治 13 年（1880 都市）までの学校は、小学校は「下等」と「上等」に分けてありました。下等学校は 6 才から 9 才までの子どもが入学し、上等小学校は 10 才から 13 才の子どもが入学しました。

上、下小学校とも１級ら８級までのクラスに分けてありました。６ケ月学習して試験に合格すると、８級から７級、７級から６級へ進みます。試験の成績が悪い子は、もう一度６ケ月の間学習をやりなおして試験を受けました。これは二度までやりなおしができましたが、三度の試験に

失敗すると学枚をやめさされました。成績のよい子は、３ヶ月ぐらいで試験を受け合格すると、上の級に進むことができました。下等小学校の１級を卒業すると、大試験を受けて上等学校へ入学しました。

このころは、学枚へ行くのに授業料というお金をおさめなければなりませんでした。これは今とちがって教育は子どものためのものだから、ひつような費用は親が出すべきだとの考えです。学枚へ子どもをやるのにお金がかかるようでは、子どもがいくら学習したくても、生活にこまる親はやることができません。だから学校へ行けない子どもはたくさんいました。

○　転々とかわった学校

三宅学校ができてから五年後の明治 13 年(1880 年）には、徳居村の子は徳居学校に通うようになりました。また、長法寺の子どもも、長法寺に御園小学校の分校ができたので、この分校にかよいました。それで三宅学校は、三宅村だけの子ビもが学習することになりました。

ところが明治 17 年(1884 年）には、三宅学校を閉じ三宅の子どもは徳居にある三徳学校に通いました。ところがよく年の明治 18 年（1885 年）には、三宅村、徳居村、長法寺村、御園村の４ヶ村で、徳居に明導学校をおきました。そして前の三宅学校を明導学校の三宅分教場としました。

○　制度のうつり変わり

このように学校が、転々と変わっている間に、今まで「下等」「上等」に分けられていたのが、明治 16 年（1883 年）1 月から三宅学校では「初等科」３年、「中等科」３年の２つに分けられました。

明治 19 年(1883 年）になると、また、学校の制度が変わり、小学校は「尋常科」４年、「高等科」４年の２つに分けられました。ところが、この制度の学校へ入学するのにお金がなくて困るところでは、半日学校へ通い、３年間で卒業できる簡易科授業所でもよいことになりました。それで三宅分教場も明治 20 年(1887 年)簡易科授業所になりました。

○　学習のようす

習字は「テナライ」といって、かなの練習からはじめましたが、だんだんむずかしくなって、手紙文などの小さい字を行書といって少しつづけて書きました。算数もはじめのころは、たし算、ひき算などの計算を筆算と暗算でしました。

読み方（国語）は、福沢諭吉の「学問のすすめ」や「世界国尽」のようなもの、また、外国の国名や地名がかん字で書かれているものや、へんたいがなのまじったむずかしい文章の本もありました。学習は先生の読まれたあとについて、少しずつ読んでいったり、本を暗しょうしたりしました。

２　明治の中ごろと終わりごろ

○　合川尋常小学校

明治 22 年（1889 年）7 月、市町村制が実施されたとき、三宅村、徳居村、長法寺村の３ヶ村は合併して、新しく合川村をつくりました。合川の名は、中の川をはさんだ３つの村が、共に力を合わせて、仲よくしていく気持をこめて名づけられました。

合川村が生まれたので、村の人は簡易科授某所を閉じ、明治 22 年（1889 年）8 月に、合川尋常小学校と呼び名を変え、尋常科４年までとし、徳居に分教場をおきました。

○　校舎の増築

明治 19 年(1886 年)には、義務教育といって、学齢児童（6 才から 14 才の子ども）は、みな学校へ行かなければならなくなりました。それで急に児童数が多くなり、明治 22 年（1889 年）12 月には、木造校舎２教室、明治 24 年（1891 年）には、木造校舎１教室を建てました。この結果、建物も小学校らしくなりました。しかし、校地の広さは、1500 ㎡くらいで、運動場はその３分の２の 1000 ㎡たらずでした。

○　不就学児

明治 22 年（1889 年）末の本校の児童数は、１年生　71 名、２年生　40 名、３年生　31 名、４年生　8 名の 150 名で、徳居の分教場には、１年生の児童だけで 37 名いました。

このように、１年生と４年生の児童数が大きく違うのは義務教育のために学校へ行く人がふえたことを示しています。しかし、この年の学令児童は 370 名で、学校へ行かない人の数は、約３分の１の 124 名もいました。その後、学校へ行かない人の数は年々とへり、明治 38 年（1905 年）には１名になりました。

学校へ行かない子どもを不就学児といいますが、こうした子どもが多かったのは、そのほとんどは家が貧しかったためでした。

○　学習のようす

明治のはじめには、教科書は自由に使えましたが、明治 20 年ごろからは、文部省の検定を受けた「検定済」の本でなければ使えなくなりました。その後、明治 37 年（1904 年）から、国定教科書といって日本中の子どもが同じ教科書をだんだん使うようになりました。

このころの学習について、83 才になるおじいさんは、「毎日だいたい、第１限は修身で、よく教育勅語を暗きしたり、行いについての話を校長先生から聞いたり、第２限は読本でよく文章を暗しょうし、第三限は算術で、筆算やそろばんの練習をし、第４限は作文、第５限は毛筆の習字でした。体操も週２回ぐらいあったように思います。」と、話しておられました。このお話のように、明治 30 年ころの合川小学校では、音楽や図工の学習はありませんでした。

しかし、しつけはきびしく行いの悪い子は、開山堂へほうりこまれたそうです。成績の悪い人は上の学年へ進むことができませんでした。

運動会も運動場がせまく、児童も小さかったため、ほかの学校とくらべてはじめられたのもおそく、明治 35 年ごろからです。

遠足は１．２年生で御園の観音山へ行ったり、近くの山でたけ狩をしたりしたそうですが、４年生になると稲生山などへ行きました。

天長節などの式の日は、着物だけで、はかまはまだはいていませんでした。式がはじまると、ご真影といって、天皇、皇后両陛下の写真をおがみ、校長先生のお話のあと、「天皇陛下万才」をとなえてすぐ終りました。

○　温習科と補習科

明治 22 年（1889 年）12 月、尋常小学校を卒業してさらに学習したい児童のために、温習科をおきました。温習科では、小学校で習ったことを復習したり、習ったことよりも少しむずかしいことを学習したりしました。しかし、明治 25 年（1892 年）3 月この温習科はなくなりました。

その後、１年たった明治 26 年（1873 年）3 月に小学校を卒業した児童のために、一年間の補習科がおかれました。温習科とよくにていて、学校で習ったことなどを練習したり、応用できる力をつけたり、生活のために役立つ学習をしました。学習時間は、小学校の時間割に合わせて、担任の先生が教えられたとのことです。この補習科には、小学校を卒業した３，４割ぐらいの生徒が通いましたが、明治 33 年（190）3 月なくなりました。

○　合川尋常高等小学校

合川尋常小学校がおかれてから、明治 39 年（1906 年）までは、尋常科のみで４年生までした。この間、学校でもっと学習したい人は、黒田小学校、亀山小学校、国府小学校の高等科へ遠い道のりを歩いて通いました。

高等科で学習したい人がだんだんふえてきたので、合川村の人が相談した結果、明治 39 年（1906 年）4 月から、高等科をおき、校名も合川尋常高等小学校と変りました。このとき、尋常４年を卒業した 79 名のうち、半分ぐらいの人が高等科へ進みました。

明治 41 年（1908 年）から尋常科は、４年生から６年生までとなり、義務教育が２年間延長されました。また、このとき高等科は４年生から２年生までとなりました。それでこの年は尋常科６年までの児童と、高等科１年生の生徒が在学しましたが、翌年の４月からは高等科２年までの学校となりました。

この制度は、昭和 16 年（1942 年）、尋常科は初等科にかわりましたが、昭和 22 年（1947 年）

まで続けられました。

金丸　恒郎

私は70年ほど前、合川小学校に学び４ヶ年の課程を経て卒業いたしました。

私どもの小学校へ通う頃はぞうりばきで、母親がおって作ってくれた木綿の羽織を着て通学したものです。世間の人々は、われわれ子供をがき呼ばわりして、農産物はお米、お茶、お蚕と、人より物を大切にしたものです。

また校舎も、今の山腹にある開山堂が山の頂上にあって、それを中心に取りかこみ建てられておりました。教室も夏は涼しくよかったが、冬はすき間風が入り寒い中で勉強をしたものです。学習の方も、読み書き、そろばんが主で、習字帳も新聞紙を切り綴り作ったもので、黒くなるまで練習をしました。今のように消費は美徳ではなく、質素が美徳でした。また師範学校という教員養成の学校を出られた先生は２人で、あとはそうでない先生で５人位いられたと記憶しております。

べん当も麦のたくさんはいったご飯に梅干しを入れた日の丸べん当でした。ときにおかずを忘れて、先生よりごちそうになったことも今だに忘れることのできないものです。

（原文より抜粋）

○　旧校舎の建設

高等科をおくため、今までの学校のままでは、学習や運動をするのに教室もたらず、運動場もせますぎました。それで学校の建っている土地を約６ｍ下げて新しく学校を建てることにしました。この土地を下げる仕事は、人がふごやもっこで土を運び、一回ごとに札をもらって、それを金にかえました　明治39年（1906年）4月に、５教室分の木造校舎１棟と職員室、用務員室を建て、運動場も約２倍に広げました。

続いて翌年の明治40年（1907年）5月には、さらに四教室分の木造校舎を建てました。これらの校舎はガラス入りで、前の障子の入った学校とくらべると、たいへんりっぱなものでした。

大正になって、さらに児童、生徒数もふえ、音楽や工作などの学習をする教室も必要になってきました。それで大正10年（1922年）10月、４教室分の木造校舎１棟を建てました。さらに戦時中の昭和18年（1943年）には、２教室分の木造校舎１棟を建てました。

○　一変した学校

合川尋常高等小学校になってからは、学習のようすや行事も急にかわりました。

明治39年（1906年）からは、唱歌（今の音楽）や裁縫（今の家庭科）を４年生から学習するようになり、翌年からは３年生も学習することになりました。明治41年（1908年）からは、尋常科５年生になると、日本歴史、地理（共に今の社会科）、理科、図画の学習もすることになり、明治44年（1912年）からは手工（今の工作）の学習もするようになりました。

明治41年（1908年）ごろから修学旅行がはじめられました。５年生は笠置山と奈良へ行きました。６年生は京都へ行きましたが、この日は朝早くから起き、下庄の駅まで歩きました。京都についてからは市電に乗ったり、歩いたりして、お寺や神社などを見学し、京極の近くの旅館で一泊しました。

学芸会も行なわれるようになり、校舎の東２教室をつかって、歌や、話や、劇をお父さんやお母さんに見てもらいました。

このころから朝礼もはじめられました。朝礼は、生徒の代表が「気を付け」「礼」の号令で、先生に挨拶し、修身の学習で習った教育勅語を代表の人が暗しょうし、先生の話があったあと「わかれ」の号令で解散したそうです。

天長節などの式にも、校長先生が教育勅語を読まれるようになり、児童や生徒は頭をさげて、うやうやしく聞きました。

○　学校のきまり

修身の時間や朝礼で暗しょうした教育勅語は、明治32年（1890年）10月に明治天皇が、国民ひとりひとりが守らなければならないことについてのべられたものでした。

この教えをうけて明治 44 年ごろ、学校でも校訓がつくられました。「至誠を本として」これが校訓のはじめの教えで、みんなで五つありました。この教えは、今のわたくしたちにとってもだいじなことです。この校訓ができてからは、大正から昭和にかけての毎日の朝礼でみんな元気よくとなえ、今日もしっかりやりますとちかいました。

また、児童心得といって、学校や、家庭生活で守らなければならない十二の教えがありました。この中には「ことばづかいに気をつけ、ぎょうぎよくせよ。」[学校のものはすべて大切にせよ。」などと書かれています。

小学生の思い出

金丸　武郎

約 70 年も昔、１年生の頃、昼の休みに急いで運動場へ出ようと走って校舎の角を曲った時、高等科の子が谷へ向かってラケットのからぶりをしていたのがひたいへ強くあたってけがをした。大勢の友だちがまわりへ集まってきた。すぐ小使さんにおぶさって先生につきそってもらい西谷の杉村医院へいって診てもらった。じきに直ったが包帯をとってからも、しばらく赤いきずあとが残ったので三日月というあだなをつけられてしまった。今ならさしずめ旗本退屈男というところだろうか。今となっては、なつかしい記憶として夢のように残っている。

３　大正のころと昭和のはじめごろ

○　学習のようす

大正のはじめから、昭和のはじめにかけての学習のようすは、あまり大きなちがいはありませんでした。学習はかねの合図ではじめました。

学習のしかたは、ほとんど先生の説明とお話を聞くだけで、今とくらべるとテストや宿題はあまりありませんでした。しかし、自分から進んで学習して、よい子がたくさんいました。

えん筆やノートは高学年になると使いましたが、１年生や２年生は、紙石ばんや、折りたたみ式の石ばんなども使って学習しました。

修身（今の道徳）　の時間には、本のはじめにある教育勅語をよく暗記し、本を読んだあと、先生の説明やお話を聞きましたが、日常の行いについての悪いところをなおすように注意されました。

国語は読み書きをしたり、ことばのわけを調べたりすることが多く、今のように文全体について考えることはあまりありませんでした。

算術（今の算数）は計算や、応用問題をたくさんしました。

理科は、本で調べたり、もけい図をみせてもらったり、先生のする実験をみたりしましたが、だんだん、実験や観察もするようになりました。

図工は、はじめのうちは、手本をみてそのとおりの絵をかきました。

体操は、明治の終りごろアレー体操、きゅうかん体操という木の用具をつかった体操をしましたが、大正になってからは、徒手体操や鉄ぼう、平均台、とび箱を使った体操や、ドッヂボールをしました。服装は、はじめのうちは着物のままでしたが、パンツやじゅばんやシャツでするようになり、女の子もブルマをはくようになりました。

書き方は、家で新聞紙をきってとじてもらった習字ちょうに、まっ黒になるまでなん回もけいこをしてから、白い半紙に清書しました。

唱歌（音楽）はオルガンのばんそうで先生の歌われるのをおぼえて歌う学習でした。

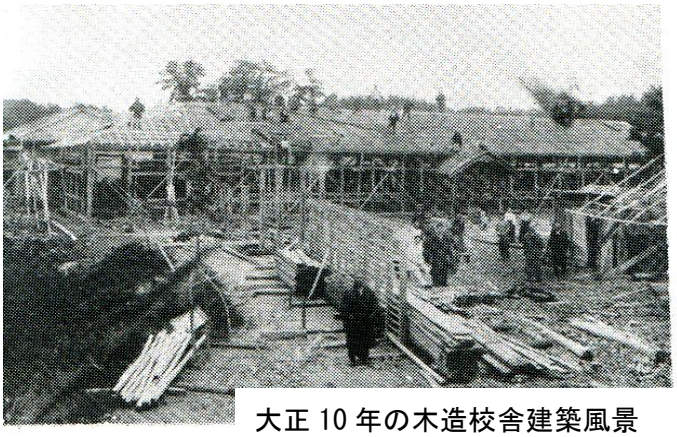
しかし、大正の終りから昭和のはじめにかけて、子供たちの考えをたいせつにする学習のしかたや、活動がだんだんふえ、作文や話し方の学習をよくするようになりました。大正 7 年（1917 年）には、教科書もこのような考えにしたがって変わりました。国語の教科書も黒色の表紙の「ハタ、タコ、タマ」から、うすずみ色の表紙の「ハナ、ハト、マメ、マス」の本に変りました。

○　学校の行事

大正 10 年（1921 年）、北側の校舎が建てられてからは、その校舎の２教室分をつかって学芸会を行い、歌や、本読み、劇のほかに、朗読や、理科の実験発表などを行いました。

遠足は、１．２年で郡山、３．４年で稲生山、加佐登神社、亀山公園、５．６年で鼓ヶ浦、津

公園などへ行き、今とくらべると大へん遠くまで歩きました。
　旅行は、尋常科では一晩どまりで奈良や京都、高等科では大阪や神戸へ行きました。
　父兄会も開かれ、学習のようすを見てもらったり、図画、書き方、手工、裁縫などの展覧会も一年に１回ありました。
　朝礼では、宮城や、伊勢神宮を遥はいするようになりました。
　明治 30 年ごろから、じょうぶなからだになるように、身長、体重、胸囲をはかったり、校医さんが、目、耳、歯やからだのようすをしらべられたりしましたが、今と比べると、トラホームの子はたくさんいましたが、う歯の子はあまりいませんでした。また、下肥をつかった野菜などを食べたので、かい虫をわかす児童や生徒が多かったので、昭和のはじめごろから海人草を毎月飲みました。


大正 10 年の木造校舎建築風景

　このころは牛で田の土を耕やしたり、牛車で物を運搬したりする以外は、鍬や、足ふみ脱穀機などの道具を使ったりして農業をしていました。それで、麦かりや、田植え、稲刈りなどの季節になると農家の人手がたりなくなるため、幼い弟や妹をつれて、子もりをしながら教室で学習する子もいました。
　特に農業がいそがしい時期には学校が休みになります。この休みには、るすばん、子もり、お使い、田畑の手伝いなど、子どもでできることはどんなことでもしました。しかし、農家でない子は学校へきて先生の指導で自習をしました。

○　服装
　通学のときは着物で、５年生以上になるとはかまをはきましたが、冬になると着物の上に、でんちやはんこや羽織を着ました。はき物は、明治のころと変わらず、ぞうりや下駄をはきましたが、大正の終わりごろにはゴム靴をはく子もいました。洋服を着て、靴をはいて通学する子が多くなったのは昭和 7～8 年ごろからです。
　本やノートなどの学用品や、べんとうもふろしきにつつんで、男の子は腰に巻きつけ、女の子はふろしきつつみを一度ひもでくくり、さらにあまったひもを結んで、そのひもを肩にかけて通学しました。大正のはじめごろから布のかばんで通学する子もいましたが、みんなが使うようになったのは昭和のはじめごろからです。
　お正月の式や天長節の日には、それぞれ家で日の丸の旗を立ててから学校の式に参列しました。式には全員はおりを着て、はかまをはくようになりました。はかまはたいていの子は、６年間使えるように大きめに仕立て、縫いあげを二、三だんこしらえてはきました。

○　子供の遊び
　男の子の遊びは、縄とび、庄屋けん、みりん、こままわし、竹馬、弓遊びなどで、女の子は縄とび、お手玉、ちどり（あやとり）、まりつき、折紙、人形ごっこ、せっせっせ、豆木遊び、石けりなどをしました。
　春から夏にかけては、土手のつくしをつかんだり、沼田にいるたにしや、どじょうをとったりり、中の川の堤や、あぜ道にいるほたるを取ったりしました。
　夏になると、川でふな、もろこ、なまずを取ったり、水遊びや水泳をしたりしました。また、せみやかぶと虫を取り、それをたいせつにかう子もいました。
　秋には杉鉄砲をつくり、冬には氷すべりや、雪すべりをしたり、こばちで小鳥を取る子もいました。
　お正月には、男の子はおもにたこ上げやこままわし、女の子ははご板遊びをしました。村祭や運動会のときは、店が出たので、２、３銭から５銭ぐらいのこづかいをもらい、あめを買ったり、庄屋けん、パッチン、こまなどを買ったりするのも楽しみでした。このように季節ごとの楽しい遊びもありました。

○　べんとうとおやつ

毎日のべんとうは麦のはいったごはんが多く、べんとうの真中に梅干の入っている子がたくさんいました。このころの人は、これを日の丸べんとうといいました。このほか、漬物も入っていましたが、ときどき魚や、かつ節などのおかずが入っていることもありました。お茶はべんとうのふちに入れて飲みました。

おやつは明治のころとあまり変わりなく、あられ、かきもち、いりそら豆、さつまいもなど家で作ったものが多く、ときどきあめ玉も食べました。キャラメル、チョコレートを食べるようになったのは大正の終りころからです。また中には、なすやきゅうりに塩をつけて食べたり、桑の実や野いちご、ぐみなどを食べたりする子もいました。

大正のころと昭和10年ごろの小学校時代の思い出

－片岡七夫氏と分部勝氏との対談－

Ｗ　あなたは60年前と言われますと、入学は何年ですか。

Ｋ　私は大正4年です。

Ｗ　そうですか。私は昭和10年です。

Ｋ　ほう、それでは20年後輩ということですね。

Ｗ　そうなりますね。十年一昔といいますので、二昔前の先輩ですね。大正の初めといいましても、私にはちょっとぴんときませんが、当時の服装はどんな様子でした。

Ｋ　当時は服と言うものはなくて皆カスリの着物に三尺帯、はきものは、もっぱら藁ぞうりで雨の日は下駄でしたね。鞄は布製の肩掛、それに学生帽はありました。き章も今のと同じでした。

Ｗ　そうですか。私の時代になりますと大分服装は近代化してきますね。冬は黒の学生服、夏は霜降りの学生服で、学生帽子に夏は白い日おりなどつけました。

はきもの等は低学年の時はアメゴムのくつ、高学年は黒いゴムぐつで、私か５年生のころにはズックぐつも使用しましたが、わらぞうりも自分で作ったりしてはきました。

Ｋ　それに５年生になると、しまのはかまをつけていきましたね。

Ｗ　カスリの着物にしまのはかま、学生帽で、肩掛かばんだと、なかなかいきなものですね。

Ｋ　いやあ、そうでもなかったですよ。当時は皆貧しくてね。それにアメぐつの話が出ましたが、私はアメぐつの事で今でも忘れられないことかあります。

Ｗ　と言われますと、どんな思い出ですか。

Ｋ　私の２年生のころのことです。父が用事で津へいきましてね。帰りに私のためにアメぐつを買ってきてくれました。それがうれしくて、寝る時に枕元に置いて寝たことを覚えています。着物姿でアメぐつをはいていったことも。

Ｗ　へぇ、大変に変わった服装ですが、大正時代の写真など見ますと、着物姿の女の人がくつをはいているのがありますね。服装の話はこれぐらいにして、学校の坂道はどうでしたか。

Ｋ　急な坂でね。国師山の北から上って、運動場の北が石の校門でした。

Ｗ　私達の時には坂道も変っていますね。北から山の西の原を南に登って途中に先生方の自転車小屋があって、そこからまた北に折れて運動場に登りましたね。校門は当時はなかったですよ。２年生の時でしたか、坂道がまっすぐ南へのびて前の校舎の昇校口の所へ登るようになりましたが、何時の時代にも学校の坂道が急なために親達は苦労をしていたようですね。

先生か出勤されますと、自転車小屋まで自転車のあと押しをするというのは合川小学校だけでしょうし、また先生との心のつながりの場でもあったように思われます。

Ｋ　ああ、そうですか。

Ｗ　学校での遊びはどうしたか。

Ｋ　休けい時間は、もっぱら道勤場で陣取りという遊びに熱中しました。軟いボールで野球のまねごとのような遊びもしましたね。

Ｗ　陣取りは私達もよくしましたね。それに今のサッカーのようなことで軟式庭球のボールでまりけりをして敵陣へ入れる遊びをよくしました。学校から帰ってからの遊びはどうです。

Ｋ　私達の時にはノートがなく石板です。おのずと宿題もないと言う事で、学校から帰ると春から秋にかけては裏の川での魚釣りでしたね。それも手作りの道具でね。それでも大きなうなぎ、なまず等釣ってきました。面白かったですね。

Ｗ　魚釣りは私達もよくしました。秋から冬になると遊びも大分変わってくるでしょう。
Ｋ　秋になるとシイの実を探りに行きました。神社や裏山に、大きな木があるので登って採ったものです。また、山へ行って兵隊ゴッコ等もしましたが、陣取り遊びに熱中しました。また、庄やはずい分一生懸命しましたね。一番子どもに人気のある遊びですね。
Ｗ　私達の時も同じですね。庄や等も夕方暗くなるまでしていて両親に叱られたことも度々でしたから。
Ｋ　庄やの絵も時代と共に変りますね。
Ｗ　私達の時は軍国主義の時代でしたから軍人の顔とか大相撲の力士が多かったです。今のは怪じゅうとかウルトラマンですね。当時の小使等はどうしたか。
Ｋ　お金は子供は持っていませんよ。当時は質素ですから。たまにお使いに行って１銭ぐらいもらってきて、アメ玉等を買ったことかおりますが、１銭で 10 個ぐらいきましたよ。
Ｗ　私達の時もよくにてますが、アメ玉は１銭に５個ぐらいでしたね。おやつは家で作ったカキモチ、アラレ等加工で、果物も柿、みかん等家でとれるむのでした。
Ｋ　砂糖キビの木も作って、生のまま汁を吸ったりして、お金でお菓子を買うようなことは年に数えるほどです。
Ｗ　本当です。それだけみな質素だったのでしょうね。桑の実やまきの実も食べましたね。
Ｋ　桑の実はおいしくて私達もよく食べましたね。それで唇が紫色になったりして。
Ｗ　今とは違って、祝日等にはお餅を作ったりしましたね。
Ｋ　そうです。あれが田舎の楽しみでしたね。まあ、昔のことを思い出すと話がつきませんが、遊びの道具でも、竹馬、たこ、コマなど自作で年上の子に作ってもらい夢があったと思いますよ。
Ｗ　同感です。子供の創造性を養うためには、昔のように質素な方がよいかも知れませんわ。
（原文抜粋）

○　なつかしい桜並木

大正 3 年（1914 年）12 月に合川村の人々は、大正天皇のご即位をお祝いして中の川沿岸に桜を植えることにしました。この時の村長であった中尾覚一さんや鈴木保太郎さんが中心になって、家々より寄附をつのって苗木を購入し、下庄より徳居の道路ぞいに約 250 本の吉野桜や右近桜などを植えました。

この桜は大正 7,8 年ごろから咲きはじめました。

「花の下を、親に手を引かれて入学したころの思い出は忘れることができません。」
「花ざかりの時や、桜吹ぶきの下を通ったとき急に心が晴れ晴れとしました。」
「校庭から見た桜の花は延々と続き見事なものでした。」
と、卒業生の誰もが口にするほどすばらしい眺めでした。

学校でも「桜の花をたいせつにしましょう。」「桜の枝を折らないようにしてください。」などと書いた札を桜の本にぶらさげ道行く人に呼びかけました。また、色紙に俳句などを書いて、さらに上達するようにぶらさげたこともありました。

桜祭が開かれた年や、児島祭には、川原に舞台も作られ、演芸が行われて親や友達と春の一日を楽しみました。

しかし、この桜もだんだん年をとり、そのうえ自動車などに根をふみつけられ、さらに、伊勢湾台風でいためつけられ、昭和 40 年（1956 年）ごろには枯れてしまいました。

○　校庭のわらがこい

学校が平地より 20ｍも高いので、北風の吹くころになると砂ぼこりが立ち、朝礼や体育や、遊びの時間などには大へん困りました。

昭和のはじめ小河九市校長先生は、厳しく吹き上げてくる北風を防ぐため、運動場の西へ高さ 2ｍのわらがこいを作ることを計画しました。

このころ高等科の生徒は、金堤橋の近くの実習田で稲を作っていたので、そのわらを使い、足りない分は子供が学年におうじて持ってきました。

先生の指導で高等科の生徒は丸太を打ちこみ、割竹を横にあて、縄で結び、わら束を広げて竹

にくくり、一段一段と積みあげて数段重ねました。
　このわらがこいのため、今までより暖かい冬の学校生活をすごすことができました。それで翌年から毎年12月になるとかならず作り、3月には取りはずすようになり、いつしか合川小学校の年中行事になりました。
　この後、実習田は今のプールの近くになり、わらの運搬はいくらか楽になりました。しかし、戦後実習田がなくなり、小学校が6年生までになってからは、わらは全部児童が家から運搬し、お父さんや、お母さんが作ってくださいました。
　運動場がせまくよくボールがけの下に落ちるので、昭和30年ごろ運動場の西側と東側に高さ1～2mの金網が作られました。それで西側の金網を使ってわらがこいを作りましたが、これは昭和43年（1968年）新しい校舎が建つまで続けられました。
　多くの子どもはこのわらがこいで北風をよけながら日なたぼっこをしたり、遊んだりしました。また、わらがこいをこわさないため、いろいろの規則を作りましたが、週番の係もきびしくかんししました。取りはずしたわらは、四日市の万古屋さんや、地元の密柑園を作っている人などに売り、その金は学校の費用にあてられました。

４　戦争のころ

○　教科書

　昭和6年（1931年）に満州事変がおこり、6年後には日華事変、さらに4年後には第二次世界大戦がはじまり、昭和20年（1945年）までつぎつぎに戦争を続けました。戦争に勝つためには心もからだも強く、日本の国を愛する国民が必要で、教育もこの考えにしたがって行われました。
　大正の中ごろから、昭和のはじめにかけて使われていたうすずみ色の表紙の教科書は、昭和8年（1933年）に作りかえられ、表紙や、さし絵がはじめて色ずりになり、明るい感じのものとなりました。国語は「サイタ、サイタ」のサクラ本となり、戦争についてのことも書かれました。
　戦争がだんだん広がると、国をあげて戦争にたちむかわなくてはならなくなりました。昭和16年（1941年）には戦争に勝ちぬく小国民を作るため、全国の小学校は国民学校とかわり、尋常科は初等科にかわりました。
　教科書も「ススメススメ、ヘイタイススメ」ではじまる兵隊さんのことや、国を守ることの必要を書いた本とかわりました。
　地理の学習では、日本の占領地を地理附図に赤くぬりました。

合川村尋常高等小学校旧校歌

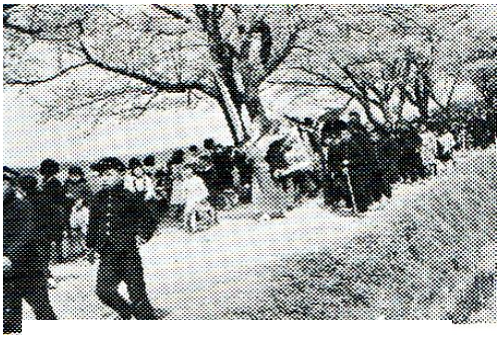
松浦　一　作歌

１神の御國の　　神風の
　伊勢のくにびと　われら皆
　天つ御光　　あきらけく
　代々に仰ぎて　　たふとしや

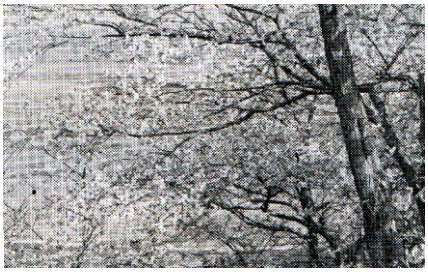
２流れも清き　　中の川
　清きこころに　　合川の
　ここにわれらの　誇なる
　夢窓國師も　　いでましぬ

３正しき道の　　ひとすぢに
　さらば働まん　　はらからよ
　神の御國の　　われらなり
　ひじりの里の　　われらなり

―　昭和７年１月より終戦までの校歌　―



中の川の桜並木と桜祭り



校庭の桜

昭和のはじめの思い出

中尾　八百治

私が合川小学校に通いましたのは今から四十数年も前のことであります。

当時、男の先生は背広ではなく黒か紺の詰め襟の服装で、女の先生は着物に袴であったように思います。

生徒は着物に袴をはいた者もあり、小倉服の者もありました。そして黒いゴム靴をはき、ズックの肩掛け鞄をかけて通学しました。

学校につくと窓のない廊下の軒下につるされた小さな釣り鐘の音で天気のよい日は［朝礼］と言って授業の始まる前、全校生徒が玄関前に集まって先生から、その日の連絡や注意かあり又「月曜教訓」と言って毎月曜日には先生が交替で有益なお話をして下さったことを覚えております。ただ現在と全く変わっておりますことは、朝礼の時間には必ず伊勢神宮と皇居の方向に向かって遙拝がありました。

唱歌室には古いオルガンが一台しかなく、学校に楽器といえばこのオルガンが　唯一のものでありました。５年生の春の遠足で一身田の小学校に行ったことがあります。そこには初めて見るピアノがあり、先生がこれはどんな音でも出ると説明をして下さって、子どもながらもひけ目を感じたことを覚えております。

夏休みは 8 月 1 日から 31 日までで、宿題をためながらも、毎日、中の川で泳いだり魚を取って遊んだことは楽しい思い出です。

1 月 1 日新年、2 月 11 日の紀元節、4 月 29 日の天長節、そして 11 月 3 日の明治節は各戸に日の丸の国旗を掲げ、授業はなく式があり、まんじゅうを一袋ずつもらって帰ったのもなつかしく、又楽しい思い出でもあります。

（原文より抜粋）

○　家での生活

このころの遊びは、昭和のはじめとあまり変わりませんでしたが、兵たいごっこが多くなり、国民学校になってからは、模型飛行機やグライダー作りがさかんになって家でも作って遊びました。

たいていの家では、お父さんや兄さんか兵たいさんになったので、家では人手がたりなくなりました。それで、子どもたちはお母さんを助けて家事を手伝い、畑や田の耕作や取り入れ、るすばん、子もりなど自分でやれる仕事を一生けんめいしました。

また、地区の少年団では防犯のため家々をまわりました

昭和 10 年頃の思い出

矢橋　冴子

私は昭和 12 年 4 月 4 日に入学しました。流れも清き中の川、清き心の合川のと校歌にもあります通り、鈴鹿おろしの風を受けて登校しました。

長い坂道を登り校庭に入りますと、合川村が一望に見え、田には菜の花、レング草、大麦、小麦、中の川の堤には（当時 1 本 50 銭）300 本の桜の木が植えられて美しい花を咲かせ、色とりどりの美しさで一ぱいでした。葉桜になると毛虫が落ちてきて学校の帰りには走って帰ってことも思い出されます。

通学時には団長さん、副団長さんがいて、その人の指図で１年生から高等２年生まで整列して足並み揃えて歌を歌って学校まで歩きました。遠い道を足早で行き、やっと学校の近くまで来ると急な坂道が待っているのです。小さな身体に、大きなカバンを背負って、味噌汁わんをぶらさげ、寒い雪の降る日なんかは足がすべってころび、汁わんを何度も割らかして、おばあさんによく叱られたものでした。

やっと校庭に入ると校舎の中央に、奉安庫があり、一礼をしてから各教室に入り、勉強にかかりました。始業の合図はおじさんが大きな鐘を振り、リンリンリンと鳴り渡る鐘の音は、小高い山の上から村中にひびき渡る程、澄み切った清らかな音色でした。　（原文抜粋）

○　学校生活

体育の時間には、号令一つで規則正しく行進できるけいこや、心とからだをきたえるけんどうやすもう、なぎなたがさかんになってきました。マラソンやかけ足で、徳居や長法寺へも行きました。

昭和 17 年(1942 年)から昭和 18 年（1943 年）ごろになると戦争がますますはげしくなりました。高等科の生徒は合川地区の兵たいに行かれた家へ勤労奉仕に出かけ畑の草けずりや田植えなどを手伝いました。

また毎日のしつけや訓練もきびしくなりました。

戦争が長びいて食べ物が少なくなってくると、食料を増産するために昭和19年(1944年)には、運動場を掘りおこし、学年ごとにさつまいも、じゃがいも、かぼちゃ、かんぴょうなどをつくり、みそ汁給食につかいました。また裏門近くの田を学校が借りて稲を作ったり、学校から南 500m の山中の畑をたがやして、いもを作ったり茶をつみとったりしました。

また、食糧のたしにするために家でとったいなごを持ちより、むして、むしろにほしてつぶし、みそ汁のだしにしました。ある人は、

「いなごと、大根のみそ汁の給食はとてもおいしく、今だに忘れることはできません。」

と、話されました。

このころヒマの種を学校でもらって、家でさいばいして実をとり供出しました。これはヒマシ油の原料になりました。また、桑の皮をむき、家でほし学校へ持ってきて売りました。服を作るのに使われたそうです。

昭和 19 年（1944 年）の終りごろからアメリカの空しゅうがはげしくなると、都市の子どもはこれをさけるため、いなかへ疎開しました。なかには合川へも疎開してきました。学校でも空しゅうにそなえて、忠魂碑の近くに天皇、皇后両陛下のご真影など入れる防空ごうや、３～４人の子どもが入れる防空ごうもほりました。避難訓練では校庭の南の松林にも避難しましたが、警戒警報が発令されると、いつも家へ帰りました。

学校の行き帰りには軍歌を敬いながら、防空ずきんを腰にぶらさげたり頭にかぶったりして通いました。

昭和 19 年（1944 年）の末には、高等科の生徒は、学徒動員といって全員寮でとまり、平田にあった海軍工しょうへ通い弾丸や火薬などつくりました。

第二次大戦以後は兵たいさんを見送る回数も多くなり、いつも軍歌を歌い、日の丸の小旗をふり下庄との境の弘法寺橋まで行きました。

このように食糧増産のために作物をつくったり、空しゅうのために家に帰ったり、動労奉仕のために農家へ手伝いに行ったり、学徒動員のため工場に行ったりしました。そのほか、いもん文を書いたり、神社へ参ぱいしたり、旗行列をしたため、学習も時間割りどおりできなくなりました

○　くらしのようす

戦争がはげしくなると、工場では飛行機や鉄砲などの兵器を作ることにいそがしく、ふだんのくらしにいる物はほとんど作らなくなりました。そのため着る物や、食べ物などもふそくして、決められた量だけしか買うことができませんでした。さとう、マッチなどは昭和 15 年（1940 年）から切符制になりましたが、そのころから、いろいろの物が配給制になりました。

米も昭和 16 年（1942 年）から配給になり、おとなで一日、２合３勺（345ｇ）でした。この量ではたりないので、おかゆや、ほかのものをまぜて食べたり、またうどん、そば、さつまいも、じゃがいもなどを代用食にしたり、ごはんがわりにしました。

衣料もふそくで、切符でなければ買えません。それで古い着物を仕立てなおした服や、つぎの当った服を着ていました。

くつも配給で、学校にくる少ないわり当てのくつを、くじを引いて買いました。また、くつのかわりに学校で工作の時間につくったぞうりで通学した子もいました。

クレヨンや絵の具などは、ほとんど買うことができませんでした。一枚の紙もだいじに使い、えんぴつもみじかくなると竹にはさんで使いました。

「ぜいたくは敵だ。」

「欲しがりません、勝つまでは。」

と、みんな不自由にたえてがんばりました。
　夜は電とうの光が外にもれると、飛行機にこうげきされるので、燈火管制といって、黒い布などでおおいをかけて光が外にでないようにしました。

皇紀 2600 年(昭和 15 年)記念寄贈　二宮尊徳像

尊徳は金次郎と呼ばれ，明治以降修身の教科書に，孝行，勤倹，力行の手本としてとりあげられたが、戦争中はこの考えを児童に徹底するため、尊徳像が建てられた。写真は合川出身、小菅賢氏の寄贈を記念してとられた。
　右の像は、昭和 15 年 11 月に寄贈されたが、銅像であったため供出し､その後昭和 27 年 9 月コンクリート像として再建された。礎石は変わっていない。

旧二宮尊徳像

今の二宮尊徳像

大東亜戦争と小学校

「終戦」ということがわすれられようとしている戦後 30 年たった今、勉強のできなかった小学校高学年のころを思い出しています。
　そのころは、学校へ行くと毎日のように、先生から戦争の話がありました。また、日本が戦いに勝つたびに、旗行列や、ちょうちん行列をして、三宅と徳居の氏神に参りました。
　ところが、昭和 19 年ころより戦争がいっそうはげしくなりました。そのころから小学校高等科の生徒が、学徒動員で鈴鹿市内で約 50 万坪の広さの鈴鹿海軍工しょうへ働きに行きました。そこの火工部というところで、火薬をつくったり、それを器具につめて弾丸をつくったりしていたのです。仕事をするところは、屋根の高さまで土盛りのしてある工場で、約 50 人ぐらいの人が働いていたのです。そのうち半数ぐらいが学徒動員の生徒で、松阪市の商業学校の生徒や、阿山郡の女の生徒もいました。寝とまりは、男生徒だけの寮で、とちゅう変わったこともありましたが、ともに工場まで歩いて 30 分ぐらいかかりました。特に、１月、２月の寒い時などは、子どものような私たちにとっては毎日いやな日でした。
　また、学校に残った児童や生徒は運動場をたがやしてカボチャや、さつまいもをつくったりして、あまり勉強をしませんでした。
　今になっても、勉強のできなかった戦時中のことがくやまれてなりません。そして、現在の平和がしみじみとありかたく感じられます。

昭和 19 年度卒業生

五、戦後の学校

戦争が終って、昭和 20 年（1945 年）8 月 15 日の正午、天皇は、ラジオを通じて、戦争をやめることを全国民につげられました。放送はざつ音が多くよく聞きとれませんでしたが、日本がアメリカなどの連合国にこうさんするということでした。これがわかると、日本はどんなことがあっても戦争に勝つと信じてきただけに、なんともいえない気特ちになりました。
　戦争が終ったときには、日本中の主な都市は、たびたびの空しゅうのためほとんど焼野原となって、住む家も、食べ物も、着るものもない人がたくさんいました。それと共に、これから先、日本は、わたくしたちはどうなるのだろうという心配が起こり、気のぬけた生活が続きました。

○　そまつなくらし

　戦争がすんだころは、着る物はなかなか手にはいらないので、つぎだらけのシャツやズボンを着ていました。運動靴も配給で一年に１回ぐらいしか当らないので、遠足や、よそ行きのときだけにして、だいじに使いました。
　石けんもなかなか手にはいらなかったので、身のまわりをきれいに洗うこともできず、子どもたちの頭にシラミがわきました。そのために、学校では中庭で、学年ごとに先生が、ＤＤＴとい

うくすりを子どもたちの頭にふりかけて駆除しました。
　学用品も不自由でした。習字のけいこをする紙は新聞紙を使い、せい書のときだけ白い半紙をもらいました。
　このころは品物が不足で、洋服のボタンもせと物でつくってあり、人々はお金よりも品物をほしがりました。そして米となべ、米と衣類などをとりかえる物々交かんがさかんに行われました。

戦争後の思い出

山鹿　ゆき子

　昭和21年、戦争で荒廃した国土で、日本中の人々が生きる為に、必死に食糧を求めていた時代です。この年の4月に入学しました。とにかく物不足の時代で一番に頭に浮ぶのは、なにもなかったという事です。入学の時ランドセルを買うのに松阪の町中をさがして、ようやく一つ見つけて買って来たと母によく聞かされました。そのランドセルも、ボール紙で作られたもので半年もたたないうちに、ふたが破れて使えなくなったのをよくおぼえています。入学当時には教科書もなくてガリバンで印刷したものを家でとじてもらって使いました。削っている間に折れてしまって満足に書けない鉛筆、宇が消えないで紙の方が破れてしまう硬い消しゴム、黒くて裏側がざらざらの薄い紙など、ひどいものでしたから、家での勉強はしたくても出来ない状態でした。一度でいいから思いきり絵や字を書いてみたいと思ったものです。
　また着るものも、母の着物やコートでリフォームしたものばかりでした。冬になると綿入れのハンテンや羽織を着て通いました。生活が豊かになった現在でも、給食は学校生活での楽しみの一つでしょうが、そのころはとにかくお腹がいっぱいになるまで食べられれば良い方でした。だから給食といえるようなものではなく、寒い冬の間だけ冷たいおべんとうを少しでも暖かく食べられるようにと、母親が交代で作りに来てくれる味噌汁だけでした。中に入れる野菜は上級生が当番で持って行きました。毎日献立の変わった内容も、豊富な今の学校給食とは比べものにならない給食でした。とてもおいしいと思って食べた味が忘れられません。

（原文抜粋）

○　戦後の教科書
　戦争に勝ったアメリカの考えで、いままでの教科書は使えなくなりました。修身や、地理、歴史の教科書は回収され、国語や算数の教科書も、戦争に関係のあるさし絵、文章や、ことばは全部切りとったり、すみをぬったりして使いました。それで大へん読みにくくなりました。
　しばらくすると、ざら紙にいんさつされた教科書がでてきました。その教科書は１まいの紙のままでしたので、それを四つ折りにして自分でとじました。さし絵も少なく、そまつな本でした。
　このころは教科書だけでなく、戦争に関係のある掛図や地図などもすみをぬり、奉安庫（天皇、皇后両陛下のお写真や勅語のいれてあったところ）のとりかたづけや、防空ごうのうめたても行われました。

○　六、三制の発足
　昭和22年(1947年）今までの教育の考え方のもとであった教育勅語に変わって、教育基本法という法律ができました。この法律により、今までのあやまちをあらため、文化のすぐれた平和な国をつくることになりました。
　また、教育の制度がかわり、六・三制といって義務教育を小学校は６年、中学校は３年間と決め、今までより３年間長くなりました。この制度により、昭和22年（1947年）4月「合川国民学校」は「合川小学校」と、よび名がかわりました。そして同じ敷地内に合川中学校が新設されました。このときの中学生は、合川小学校の一部と鈴鹿郡加太村越川にあった小学校の学校林を売った金で、運動場に建てた二教室を使って学習しました。ところが、昭和23年（1987年）7月に、隣の昼生村とともに組合立の合生中学校に変わり、昭和24年（1949年）11月今の平田プレス工場のどころに建てられた校舎へ移りました。

○　検定教科書
　昭和24年（1949年）になると新しい教育にふさわしい検定教科書を使うようになりました。

明治の終りごろから国定教科書を使っていましたが、これからはそれぞれの地方に応じた教科書がふたたび自由にえらぶことができるようになりました。
　これらの検定教科書もその後２回ほど改められましたが、アメリカをはじめ、ほかの国々の教科書を参考にして作ったので、戦前の教科書とくらべると大へんりっぱになりました。

○　新しい学習
　戦後は戦争に関係のある学習はきびしくとりしまられ、集会や体育に時間にきちんとならんで「気をつけ」などの号令をかけてする集団訓練はできなくなり、また、しばらくの間国旗も掲ようできませんでした。
　そして主にアメリカなどの学習のやりかたをとり入れて、今までの修身・国史・地理・裁縫という教科がなくなり、かわりに社会科、家庭科ができました。
　学習のしかたも、先生から教科書を教えていただくことから、自分で調べたり、作ったり、研究したり、みんなで発表したり、話しあったりして確かめるようになりました。
　実さいに見たり、聞いたりして学習をするため、２．３年で白子の海岸へ貝の採集に行ったり、６年生で、四日市の万古焼の工場や、津にある放送局や新聞社を見学しました。修学旅行は５年生で奈良、６年生は一晩泊りで大津や京都へ行ったり、奈良や京都へ行ったりした年もありました。その後、学習内容なども変わり、昭和 45 年（1970 年）から、鈴鹿市の学校は、３年生は市内、４年生は四日市の工場や港、津の県庁などの社会見学、５年生は奈良、６年生は京都、大阪へ修学旅行で行くようになりました。
　また、映画や幻燈を見て学習に役立てました。市内の学校をつぎつぎにまわってくる巡回映画を見たり、新しいフィルムを購入したりしたときには幻燈会が開かれました。
　自分でしらべたり、研究したり、ゆたかな心をつくるためには、参考書や読みものなどをそなえつけた図書室が必要でした。それで、本や資料を整えたりっぱな図書室がつくられました。みんなよろこんで利用しました。昭和 28 年（1953 年）には、三重、愛知、岐阜三県の図書館コンクールに応募し入賞しました。
　昭和 22 年（1947 年）自由研究の時間が設けられましたが、その後児童会や学級会、クラブ等の時間にかわり、みんなと学校や学級をよくしたり、自分の趣味をのばす学習をしたりするようになりました。
　また、よい社会人となるための学習として昭和 33 年(1958 年）道徳の時間がおかれました。

○　給食のはじまり
　昭和 22 年（1947 年）ごろは、食りょうが大へんふそくしていましたが、学校では、冬だけ運動場などの畑でつくったいもなどを入れたみそ汁給食がありました。
　このころ、ユニセフやアメリカなどから、クッキー、チョコレート、あんずの実などのかんづめが送られ、学校で子どもたちに分けあたえられました。そのうち、ミルクの配給があり、ミルク給食がはじまりました。このミルクは、脂肪分をとりのぞいた、こなミルクで作ったものでした。
　昭和 26 年（1951 年）2 月か ら、ミルク以外にみそ汁、五目豆、カレーシチューなどを、お母さんがこうたいで学校へきて作ってくださいました。昭和 28 年（1953 年）の夏休みには、家庭室を改造して給食室としましたが、昭和 34 年（1959 年）4 月から、パン、ミルク、副食のそろった完全給食になりました。

昭和 30 年ごろの学校の思い出

真弓　史郎

　母に手を引かれ、この合川小学校に入学したのは、昭和 34 年 4 月で中の川の桜並木がとてもきれいに咲いていました。
　１年生の教室にはラクガキ黒板や、わなげなどがあり、また、よく三谷先生に紙芝居をしてもらったものです。休憩時間には保健室へいって谷先生のひざにのせてもらった事を記憶しています。あのころ、校舎は運動場の南の端にあり、玄関の東側には二宮金次郎の像がありました。北の端には鉄棒、ブランコ、すべり台、遊動円木があり一段高い丘には忠魂碑が立っていました。

休憩時間には南の端の校舎から北の端のブランコまでよく走ったものです。冬になると有名な鈴鹿おろしの風のため、父兄が、わら囲いを作ってくれたものです。毎年春と秋には遠足があり、夏には、一番うれしい夏休みかあって、毎日中の川で水泳したり、池や川で魚釣りをしたりして遊び、宿題をせずによく先生にしかられました。10 月 11 日には運動会があり、いろんな競技に出たものです。やがて冬休みがあり、元旦には登校して校長先生の話を聞き、紅白のまんじゅうをもらって帰ったこともありました。

修学旅行では猿沢の池で落ちそうになったり、若草山で走り下ったり、旅館では、まくらをほつけ合うなど、引率の先生をこまらせてばかりいました。そんな自分でも卒業の時は、やはりさみしい気持ちがしました。こうして思い出をつづっていますと、小学校６年間のいろんな事が思い出され、先生にしかられたのも昨日のようでなつかしく、今ではよい思い出となりました。

○　ＰＴＡ

戦前の教育はたいてい学校にまかせきりでした。しかし、戦後アメリカの教育のやり方をとり入れて、先生とお父さん、お母さんがよく話し合い、協力して子どもをよくすることになりました。

そのためのしくみとして、昭和 23 年（1948 年）ＰＴＡが結成されました。それからは、授業参観や学級懇談会も多くなり、子どもをよくするための研修会や講演会も開かれました。また、家庭と学校を結ぶ新聞として「緑ヶ丘」も一時発行されましたが、昭和 46 年（1972 年）からは「合川教育」として、校区各家庭に配られるようになりました。

特に、ＰＴＡの人々は、学校をよくするために、度々奉仕作業をしてくださいました。前の校舎のときは、わらがこいをつくったり、表や裏の坂道を修理したり、校庭の草引きや土置きなどをしてもらい、また、新しい校地・校舎や、体育館、プールの建設のために大へんほねをおってくださいました。

今校庭にある岩石園や、学校園、学級園、観察池は、新しい校舎が建てられたあとでつくられました。毎年肥料をやっていただいている校庭のがけのさんご樹、かいづかいぶき、うつきなども、そのころあせ水を流して植えていただいたものです。

○　不便だった学校

わらがこいのわらや、学用品や、給食の物資を運ぶたびに、学校の坂はせまくて急なだめ大へん不便でした。

雨天の日は、ミルクや副食の物資を運んできた人は、学校まで運ばず、坂の上り口近くの自転車小屋へ置いて帰ったりしました。こんな時は、先生や、用務員さんや、６年生の子がその物資を給食室まで運びました。

校地が高いので、学校でつかう井戸はがけの下にありました。ポンプが故障したり、渇水期になったりすると、給食の食器など洗う水が不足しました。それで、ＰＴＡの人にお願いして、リヤカーにたるを積み、学校近くの家へ水をいただきに行ってくださったこともありました。

掃除の水は、雨水を池に入れてその水をつかいました。

それでＰＴＡの人が、昭和 35 年ごろ、自動車が通れるように、裏の坂道を修理してくださいました。

冬になって雪が降ると、表道の坂はすべってなかなかのぼれません。それで旧校門の近くにあったくすの木に、網引きのロープをくくりつけ、それを持ちながら登ったこともありました。

運動場もせまいため、ボールもがけ下によくころげ落ちました。子供の中にボールよりも先に下りて拾う子もいたそうです。

私の小学校時代の想い出

矢橋　まり子

薄暗い廊下、シミで汚れた天井、うっかりしてるとよくモノをささらかした机や椅子、すべてが私にとってなつかしい想い出そのものです。

みんなが揃って楽しかった集団登校。土曜日には、あの「鈴鹿の空は今日も微笑む」のレコードか運動場いっぱいに流れて、地区ごとに全員一緒になって帰ったこともありました。

通信簿は備考欄を見ると、私の小学校時代はずいぶんおてんばだったようです。今でもはっき

りと覚えていることは、雪の降る寒い朝、学校へ着くなり運動場へ飛び出して雪合戦をした時のこと、男の子に雪で固くかためた雪玉を顔に投げられ鼻血を出したことです。ドッヂボールもしたし、縄とびもしたし‥‥‥、ほんとによく遊びました。勉強の方は‥‥、ちょっと‥‥。
　私の心の中に残っている合川小学校は、長い桜並木や、清らかな中の川を見おろした想い出の母校です。　（原文抜粋）

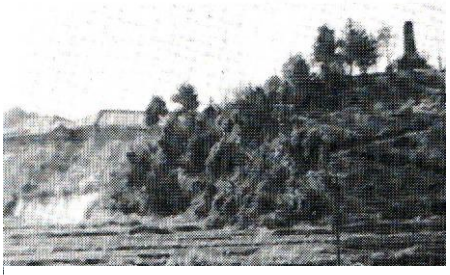
中田　　和之

　私か辞令をもらって合川校にきたとき、先ずびっくりしたのは、山の上（海抜 36m、平地より 20m）に学校のあることであった。勾配 13、長さ 100mの坂を登るのである。後に私はオートバイでこの坂を登ることになったのであるが、坂の下でローギアに切り換え、オートバイから降り、オートバイについて走りながら登るのである。坂を登り切ると、すぐ渡り廊下、便所かあり、パッとオートバイを止めないと危いのである。そして、また驚いたのは校舎のオンボロなることであった。初め私は山の上にある避病院（伝染病院）かと思った程であった。
　廊下は、縦に板を張るものとばかり思っていたが、この学校は横に板が張ってあるのであった。そればかりか、所々つぎ板が盛りあがって打ってあるのである。
　職員室は、北の一番寒い教室であり、その部屋は二方が壁、一方が大きな貯水槽（高さが軒までもある大きなもの）で三方がふさがり、一方だけがガラスなのである。それも殆どすりガラスであった。部屋の中には 20Wの蛍光燈が一つぶらさがっているだけなのである。その当時は宿直があったが、夜は職員室での仕事は不可能であった。昼間でもこの職員室にいることはユーウツであった。
　便所は金隠しはなく板に穴があいているだけのものであり、柱と壁の間にすきまがあり、宿直の朝などブルブルふるえて用便をしたものである。その上、いつも水一杯であり、爆弾投下するとおつりがくるので、尻を振ったり、角度を考えたり、古むしろをほりこんで、その上に投下したり色々工夫したものである。後に南の方に１ヵ所便所が増設されたが、これがまた見事なものであった。幅 20cm、深さ 15cm ほどのセメントの溝か一本通っているだけのものであった。もちろん、水洗なんてものはないから大の方であると、掃除当番になった者は大弱りであった。
　便所の事で思い出したが、運動会の時には運動場の北東隅に穴を掘り、むしろで囲んで即席便所を作ったのもなつかしい思い出である。それは、運動場が極めて狭く、現在の四分一程あるかないか位の広さであったから、トラック（走る所）を作ると観客席がごく狭く、それも西側だけ（東側はトラック、南側は本部席、北側は入退場口）で、とても便所へ行く余裕の場所なんてなかったからである。　（原文より抜粋）

６　今の学校（１００周年のころ）

○　危険になった校舎

　明治 39 年、40 年、大正 10 年、昭和 18 年に建てられた木造校舎も、長い年月の雨・風にさらされて古くなり、台風がくると校舎は波のようにゆれて危険になりました。校舎や運動場のまわりは急ながけで雑木や雑草がしげり、まむしなどもいました。また、校舎とがけの問がせまいので、大雨や地震の時はがけくずれが起こる心配がありました。


昭和 42 年　学校東側風景

○　校舎の建築

　昭和 35 年（1960 年）ころから、校区の人や子どもたちは、安全で便利で、新しい時代にあった学校を建ててほしいと考えるようになりました。
　昭和 39 年（1964 年）2 月になって、このことを市長さんにお願いしました。それと共に合川小学校建築促進委員会をつくり、早くりっぱな学校を作る運動をすすめると共に、新しい机や椅子、戸棚などをそなえつけるために校区の人がお金を出し合って積みたてることにしました。

建設中の新校舎

昭和 42 年（1967 年）　になって、校地を９ｍ下げると共に、校舎の北、西の山林と水田を買い、東西 70m、南北 130mの長方形の土地に、鉄筋３階の校舎などを建てることが計画されました。

この年の 8 月、市が山林や水田を買いとり、工事にかかりました。まず校舎の北側の運動場と山林を９ｍ下げるため、毎日 10 台以上のトラックで、砂や土を鼓ヶ浦のうめ立地や、磯山の住宅団地の整地用の土として運びました。そして４ヶ月後の 12 月には校舎の建築にかかり、約半年かかって鉄筋三階建ての新校舎ができあがりました。

校舎ができあがると同時に、積立貯金や特別寄附のお金で、教室や特別室の戸棚、机、椅子、それに放送の施設やテレビ等が備えつけられました。そして、昭和 43 年（1968 年）7 月 16 日から、子どもたちは目をかがやかせて、気分を新たにして学習をはじめました。

そのあと、南半分の古い校舎をこわし、校地と同じ高さまで下げるため土を運んだり、田をうめたてたりして、今の広々とした運動場を作りました。これらの工事により、校地も運動場も前の二倍半となりました。

昭和 44 年（1969 年）4 月までに、物置、用務員住宅、給食室、体育小屋がつぎつぎとできあがり、8 月には屋外便所、岩石園、学級園、同じ年の 11 月には正門をつくり、11 月 29 日には校舎の竣工式が盛大に行われました。

○　体育館の建設

新しい校舎の建設に続いて、昭和 45 年（1970 年）7 月、屋内体育館の建設にかかり、５ヶ月後の 12 月にできあがりました。

この体育館には、鉄棒、暗幕がとりつけられ、バレーコートも作られましたが、思いきり体育や集会ができるように地区の人が平均台や卓球台、バレーのポール、ろく木、のぼり網、ステージのカーテンや折りたたみ椅子などを寄附されました。

翌年の 2 月、体育館建設のお礼のため、市や地区の人々を招き、音楽、劇、朗読などの学習発表会を行いました。

○　プールの建設

長い間楽しく泳いだ中の川も、昭和 30 年ごろより上流の工場などの汚水や、稲の消毒の農薬が流れこむなどして水が汚れだしました。それで、学校では昭和 35 年ごろから中の川での水泳を禁止しました。

水泳をするところもないので、昭和 39 年（1964 年）になって、４年生以上の人が稲生小学校のプールをかりて泳ぐ練習をしました。その後、天名小学校のプールをかりましたが、昭和 46 年から、１．２．３年生は、昼生小学校のプールをかりました。

「泳ぎたい。」と考えているみんなの願いが通じて、市や校区の人などの協力によりプールが作られることになりました。

昭和 49 年　プール開き

昭和 49 年（1974 年）5 月から工事にかかり、３ヶ月たって大プールと小プールができあがり、8 月 20 日にはプール竣工式とプール開きをしました。プール開きには箕田小学校児童の模範競泳のあと、みんな待ちに待ったプールへよろこびの声をあげて入りました。

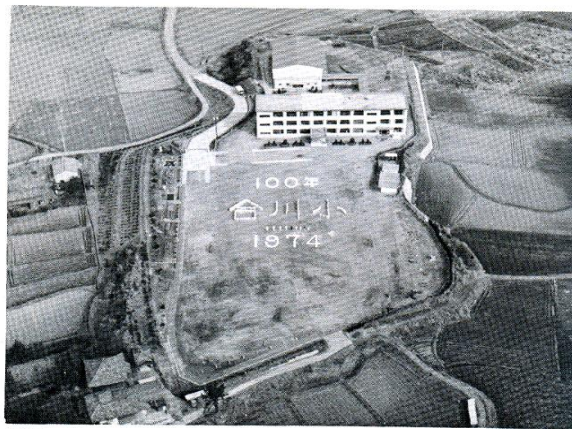
○　学校創立百周年記念行事

明治 8 年（1875 年）この校区に学校が創立されてから、昭和 49 年（1974 年）は百年目にあたりました。学校では、ＰＴＡと共に 10 月 20 日に記念行事を盛大に行いました。

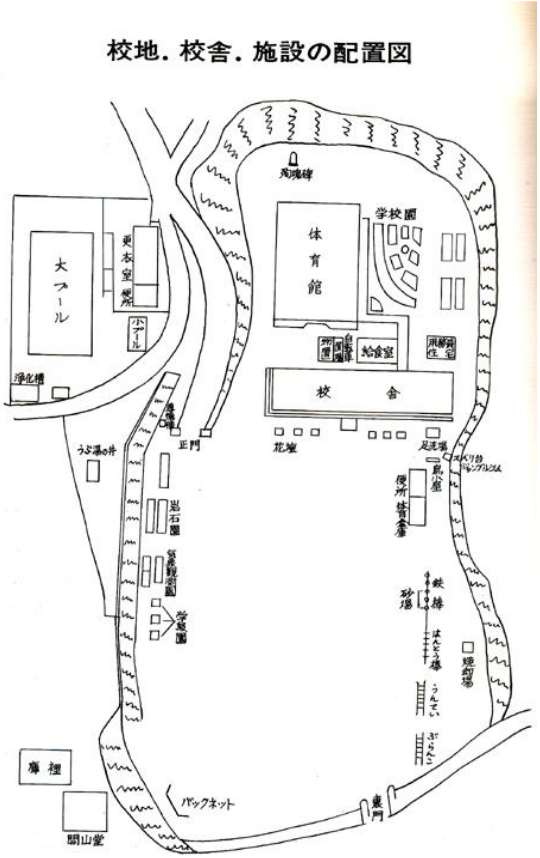
この日は、はじめに体育館で祝賀式があり、来賓やＰＴＡ、地区の人々が参加して聞かれました。この式に合川地区を卒業した人々から学校へ、創立百年にふさわしい校旗とバックネット、ジャングルジムなどの施設が寄贈されました。そのあと、児童や卒業した人のかくし芸大会がありました。

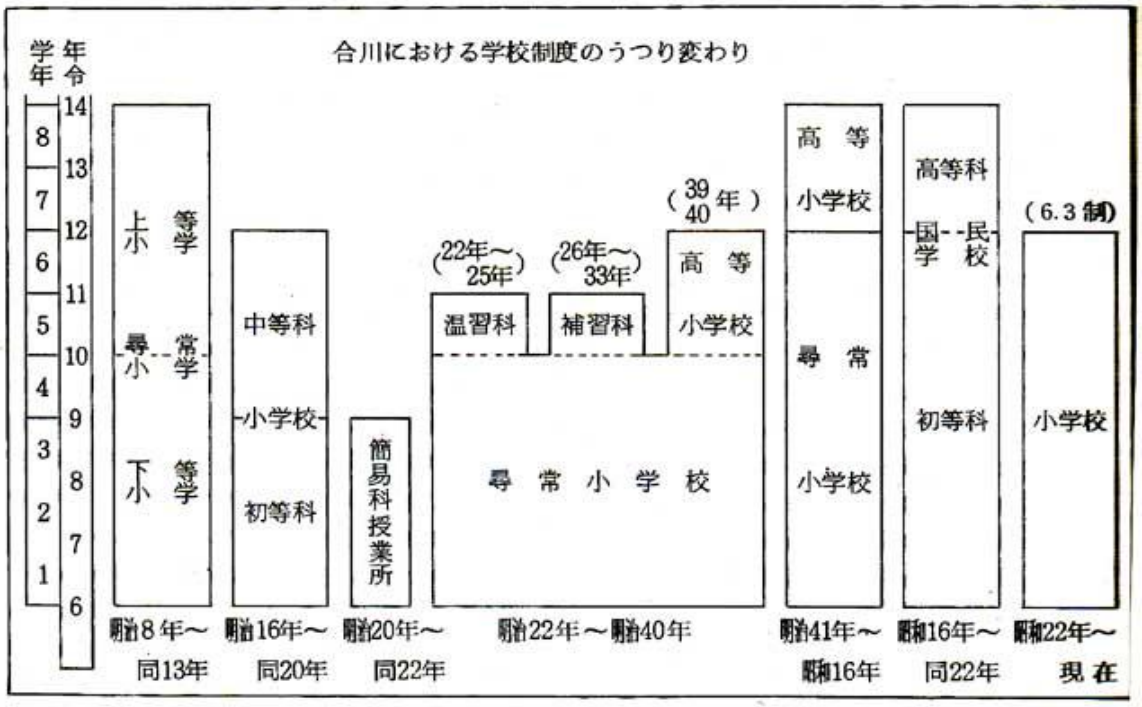
また、本館では在校生の図画、習字、工作などの作品をはじめ、むかし学校で使った教科書や、

学校からいただいた卒業証書や賞状の展示のほか、生活用具や盆栽などの展覧会が聞かれました。
この日は地区の人々が大ぜい学校へきて、合川小学校 100 年のあゆみをふりかえりなつかしい半日をすごしました。
祝賀式のとき、百年祭実行委員長であった村田清光さんは「自然のかんきょうにめぐまれたこの土地に、卒業生や校区の方々の力で、近代的なりっぱな学校ができあがりました。しかしわたくしたちは、子どものしあわせのため、さらに、りっぱな学校にしたいと思います。」と話されました。
この校地には、4000 人におよぶ卒菜生の人々の思い出がきざまれています。また委員長さんのお話のとおり、卒業された方々は、みなさんのしあわせを願っておられます。
わたしたちはこの 100 年の歴史をもつりっぱな学校に学ぶことをほこりとし、合川村と名づけられたことばのわけをよく考え、友達と力を合わせてりっぱな人になり、よりよい学校をつくるようにがんばりましょう。



昭和 49 年　航空写真





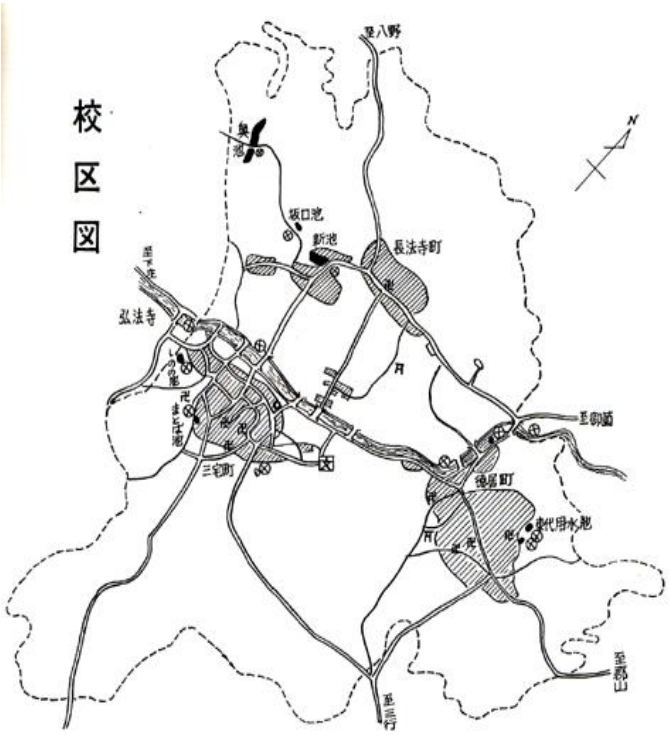
沿　革　史

月　日	で　き　ご　と
明治 8 年 (1875 年)	三宅学校ができる。 創立　明治 8 年 11 月 19 日(11 月 19 日は現在の小学校創立記念日) 所在地　大７大区　２小区　奄芸郡三宅村字東山（国師山）3694-2 番地 海抜 51m。 名称　三宅学校（三宅村・徳居村・長法寺村の児童が入る） 学級　上下の２等級に分け、更に４等級ずつ８等級にわける。 ３棟５教室、４学級。児童数 240 人。 その他　明治 37 年まで、校舎に隣接して、転輪寺の開山堂、東山の麓に鐘楼堂、土蔵造りの山門(釣鐘は長善寺に現存)、北の麓に夢窓国師の産湯の井戸、敷地の北に、八幡神社、行者堂があった。
明治 13 年 (1880 年)	5 月 5 日、徳居村は分離して徳居学校を置く。 8 月、長法寺村は分離して御薗村校の分校となる。
明治 16 年 (1883 年)	1 月、初・中・高の３等科に変更、中等科と資格指定され、初等科３年、中等科３年の二つに分かれる。
明治 17 年 (1884 年)	2 月、徳居村、三行村は連合して三徳学校を設ける。
明治 18 年 (1885 年)	5 月、徳居村、長法寺村の二村は御薗村と連合して明導学校を設け、徳居村に本校を設置する。三宅学校は、明導学校の三宅分教場となる。
明治 19 年 (1886 年)	小学校は尋常科 4 年高等科 4 年となる。
明治 20 年 (1887 年)	県令第４号小学校設置区域並びに位置資格の制定に当たり、明導学校三宅分教場簡易科授業所に指定される。
明治 22 年 (1889 年)	4 月、町村制実施に伴い三宅村、徳居村、長法寺村は合併して合川村となり、同年 8 月 27 日願いの上、合川尋常小学校を設置する。 9 月、徳居に分教場を設けて義務教育となる。 12 月、西校舎一棟建坪１８坪を建築する。
明治 25 年 (1892 年)	7 月、徳居分教場を廃止する。
明治 39 年 (1906 年)	4 月、高等科を併置し合川尋常高等小学校と改称する。 4 月、５教室分の木造校舎１棟（西校舎)、職員室、用務員室建設と運動場の拡大をする。(6m敷地を下げる。海抜 45m。＞　４棟１５教室８学級。児童数 410 人。
明治 40 年 (1907 年)	5 月、４教室分の木造校舎１棟（南校舎）を建設する。
明治 41 年 (1908 年)	尋常科 4 年から 6 年に 2 年間延長となり、義務教育は 6 年となる。高等科は 4 年から 2 年となる。この制度は、昭和 16 年尋常科が初等科に変わったが、制度的には昭和 22 年、六・三・三・四制の制度改革まで続いた。
大正 10 年 (1922 年)	10 月、４教室分の木造校舎１棟（前校舎）を建設する。
昭和 16 年 (1941 年)	4 月、合川村国民学校と名称を変更する。
昭和 18 年 (1943 年)	2 月、２教室分の木造校舎１棟（西校舎）を建設する。
昭和 22 年 (1947 年)	4 月、法律第 26 号および文部省令第 11 号により、六・三・三・四制となり、高等科を中学校と改称分離し、合川村小学校となる。
昭和 29 年 (1954 年)	8 月、鈴鹿市に合併のため、鈴鹿市立合川小学校と改称する。
昭和 43 年	7 月、校地９ｍ下げて(海抜 36m)、土を西に押し出して埋め立て、鉄筋コンクリー

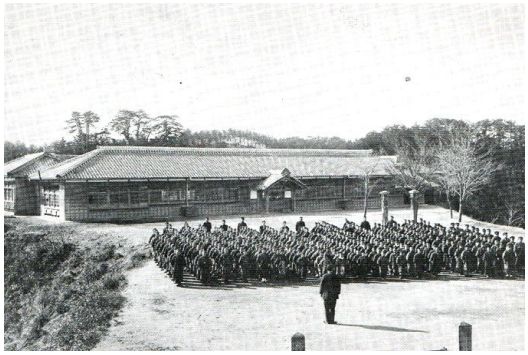
(1968 年)	ト三階の校舎を新築する。(この為敷地は以前の約 2.5 倍となる。)
	校地　15399 ㎡　敷地面積　3000 ㎡　運動場　5000 ㎡　その他　4534 ㎡
	教室９・その他８。用務員住宅・給食室。児童数 193 人。
昭和 45 年	体育館新築のため、7 月に着工し 12 月に竣工する。
(1970 年)	
昭和 49 年	5 月　プール建設のため、5 月に着工し、8 月に竣工する。
(1974 年)	大プール　250 ㎡　小プール　18 ㎡　総面積　865 ㎡
	10 月　創立百周年記念式典及び記念行事を実施する。
	校旗・バックネット・ジャングルジムの寄贈をうける。
昭和 55 年	1 月、理科教育市教委指定校として発表する。
(1980 年)	10 月　ソニー理科教育振興資金優良校として受賞する。
昭和 56 年	3 月　体育館用便所が完成する。
(1981 年)	
昭和 58 年	2 月　自転車置場完成。県ＰＴＡより表彰される。
(1983 年)	5 月　バックネット及び北側フェンス完成。
昭和 62 年	8 月　校地のり面補修が完成する。
(1987 年)	
平成 1 年	9 月　本館改築工事をする。。
(1989 年)	
平成 2 年	2 月、体育館を取り壊し、室内運動場を建設竣工する。
(1990 年)	3 月、特別教室棟（図工科室・家庭科室）を建設竣工する。
平成 6 年	4 月　文部省開発実験校（英語３年）の指定を受ける。
(1994 年)	
平成 7 年	学校週５日制（第２，４土曜休校）が実施される。
(1995 年)	4 月　給食センター方式による給食を開始する。
	7 月、給食室・用務員室を取り壊し、8 月、特別教室棟（食堂・図書室・コンピュ
平成 8 年	ター室）を着工し、翌年 3 月に竣工する。
(1996 年)	5 月　特別教室竣工記念学習発表会を開催する。
	8 月　バックネット改築・普通教室，特別教室(理科室・音楽室)の改修をする。
平成 9 年	3 月　文部省開発実験校（英語３年）の指定を終了する。
(1997 年)	4 月　鈴教研委託研究校の指定を受ける。
平成 10 年	8 月　階段の手すり，洋式便器の設置をする。。
(1998 年)	10 月　鈴教研委託研究校として研究発表会（特別活動（英語））を開催する。
	8 月　普通教室等のインターホンを設置する。
平成 11 年	12 月　東海郵政局長賞を受賞する。
(1999 年)	7 月　本館を耐震構造に改良するとともに，本館内外改装及び教室整備をする。
	9 月　運動場の南西隅に防災用の井戸を掘削する。
平成 12 年	10 月　パソコン室にパソコン 10 台を設置する。
(2000 年)	
平成 13 年	10 月　体育館裏に防災用コンテナを設置する。
(2001 年)	
平成 14 年	完全学校週５日制が実施される。
(2002 年)	4 月　鈴教研委託研究校の指定を受ける。
平成 15 年	11 月　鈴教研委託研究校として研究発表会（生活・総合）をする。
(2003 年)	
平成 17 年	8 月　パソコン室にパソコンを 22 台設置する。
(2005 年)	
平成 18 年	8 月　義務教育の質の保証に資する学校評価システム構築事業推進協力校の指定
(2006 年)	を受ける。
平成 20 年	4 月　特別支援学級(知的)の新設。学級名をオアシスとする。
	10 月　西の坂道を改良舗装する。

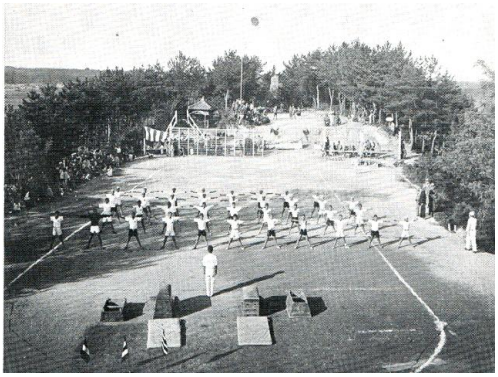
(2008 年) 平成 21 年 (2009 年) 平成 22 年 (2010 年)	4 月　学校支援地域本部事業を受け、各ボランティアを募集する。 6 月　子どもの体力向上学校支援事業研究実践校の指定を受ける。 8 月　パソコン室のパソコン(22 台)を新しく入れ換える。

内国　善言　（明治 20～明治 21）	岡本　三郎　（明治 21～明治 43）
小川　千句　（明治 43～大正 2）	中野　善三郎　（大正 2～大正 9）
義村　龍一　（大正 9～大正 13）	田中　末一　（大正 13～大正 15）
小河　九一　（大正 15～昭和 4）	小林　丈一　（昭和 4～昭和 5）
横田　要蔵　（昭和 5～昭和 7）	西井　文一　（昭和 7～昭和 10）
丹羽　平左ェ門（昭和 10～昭和 12）	米倉　義郎　（昭和 12～昭和 14）
橋爪　多喜郎　（昭和 14～昭和 18）	新山　文吾　（昭和 18～昭和 20）
水谷　首郎　（昭和 20～昭和 22）	中尾　義行　（昭和 22～昭和 25）
高橋　竹郎　（昭和 25～昭和 27）	別所　三郎　（昭和 27～昭和 29）
三谷　八　（昭和 29～昭和 31）	松本　荘之助　（昭和 31～昭和 33）
山岸　正則　（昭祀 33～昭和 35）	中尾　延夫　（昭和 35～昭和 39）
二見　雄　（昭和 39～昭和 44）	大井　孝雄　（昭和 44～昭和 46）
福島　良一　（昭和 46～昭和 49）	田中　鍔生　（昭和 49～昭和 52）
川合　忠一　（昭和 52～昭和 54）	伊藤　敏宙　（昭和 54～昭和 59）
鈴木　昭　（昭和 59～昭和 63.）	西村　幹　（昭和 63～平成　2）
森　潔　（平成 2～平成 5）	勝村　幸生　（平成　5～平成　7）
伊藤　哲　（平成 7～平成 9）	松城　勝春　（平成　9～平成 11）
伊藤　克幸　（平成 11～平成 14）	伊藤　昭夫　（平成 14～平成 17）
藤田　秀昭　（平成 17～平成 19）	萩野　敬幸　（平成 19～平成 21）
石田　聖士　（平成 21～　　）	



昭和 49 年の校区地図





旧校舎と運動場

体　育　館

本　　館

倉庫と給食室

プ　ー　ル

屋外便所と体育倉庫

用務員住宅

学　級　園

遊　　具

昭和 49 年の学校の様子

校　旗

校　章

校　　歌

作詞　松浦　一
作曲　弘田　竜太郎

♩=116

1. ながれも　きよき　なかのがわ
2. ただしき　みちの　ひとすじに

きよきこころにあーいーかわの
さらばはげまんはーらーからよ

とうときひーーとのおもーいでのー
あさひのひーーかりみにーあびてー

むかしゆかしきこのーさとよ
ほしのぞみのいやーたかく

夢窓国師と合川小学校

○　夢窓国師の生涯（しょうがい）

夢窓国師は、三宅町の人里離れた東山で、建治元年(1275 年)11 月 1 日に武士の子として生まれました。父は佐々木朝綱（ささきあさつな）と言い、子どもの時の名前は智雀（ちじゃく）といいました。

４歳の時、両親とともに甲斐（かい・今の山梨県）へ移りましたが、父も母も早く死んでしまい、９才の時にお寺のお坊様になりました。たいへん優秀で、各地にたくさんのお寺をつくりました。

鎌倉幕府がほろんだ後、後醍醐天皇（ごだいごてんのう）が天皇中心の政治（建武の新政）を始めますが、その後足利尊氏と対立するようになりました。この時、夢窓国師は、この対立をまとめようと努力をしました。しかし、後醍醐天皇はなくなります。足利尊氏は、なくなった後醍醐天皇のために、京都に天龍寺（てんりゅうじ）を建てましたが、そのときに力をつくしたのが夢窓国師でした。夢窓国師は、正平６年（1351 年)、京都で 77 歳でなくなりました。

○　ここに初めてお寺ができる

夢窓国師の功績と、早くなくなってしまったその父母をとむらうため、奈良でお坊様になっていた夢窓国師の叔父である明真律師(みょうしんりっし)は、今、合川小学校がある場所に国師山琳勝寺（こくしざんりんしょうじ）というお寺を建てて移り住みました。その後、200 年ほどは続きましたが、やがて無住（住む人がいないお寺）になってしまい、誕生の地であることも忘れられようとしました。

○　輪聖寺ができる

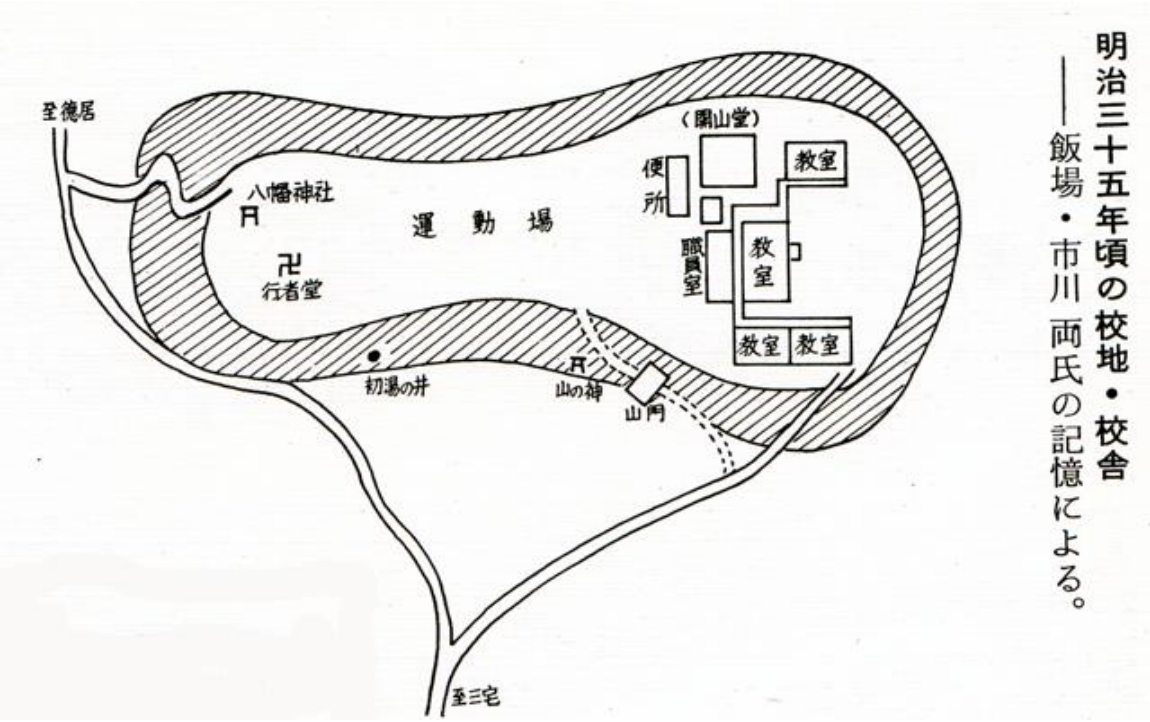
その後、宝永２年(1705 年)、三宅の人が京都へ行き、天龍寺に三宅の地が無窓国師の誕生地であることを申し出ました。天龍寺は直ちに調査員を派遣して調査した結果、真実であることを認定して、さっそく正保(1646 年)、天龍寺の中にある弘源寺（こうげんじ）の住職天琢和尚（てんたくおしょう）に命じて工事を始めました。５年をかけて、山のふもとのお寺を山上に移し、開山堂と山門を建て、産湯（うぶゆ）の井戸の建物を新築して、曹源山輪聖寺（そうげんざんりんしょうじ）として名前を改めて完成しました。こうして忘れられようとしていた無夢国師の誕生地に、当時の有力者からの寄付で、りっぱなお寺ができました。こうして、160 年ほどの間、誕生地としてお寺は明治の始めまで続きましたが、ついに無住となってしまいました。

○　学校ができる

明治 5 年(1873 年)11 月、無住のお寺は廃止するというきまりができて、この寺は国のものとなりました。このころ、各地に学校が作られることになり、明治 8 年(1785 年)11 月 19 日に、今の運動場のま上にあった輪聖寺のくり(お寺の人が住むところ)や、お堂(開山堂)を学校と決め、三宅学校と名づけました。山門は取りこわされ、つり鐘は長善寺に売られました。

○　学校が建てられる

明治 19 年(1886 年)には、義務教育といって、学齢児童（6 才から 14 才の子ども）は、みな学校へ行かなければならなくなりました。それで急に児童数が多くなり、明治 22 年（1889 年）12 月には、木造の校舎が建てられました。さらに、明治 39 年（1906 年)、今までの学校のままでは、学習や運動をするのに教室もたらず、運動場もせますぎました。それで学校の建っている土地を約６ｍ下げて新しく学校を建てることにしました。この土地を下げる仕事は、人がふごやもっこで土を運びました。この時に、開山堂は、山の中腹に移されました。その後も、学校へ通う子どもがふえるたびに、校舎は造られていきました。今の学校は、昭和 43 年（1968 年）にさらに９ｍ下げて校地を広げています。



○　お寺がふもとに造られる

一度廃止された輪聖寺でしたが、明治 36 年(1904 年)、貫道和尚（かんどうおしょう）がきて、山のふもとのくりとお堂が新築されました。しかし、明治 45 年(1913 年)にはまたも無住となりました。

昭和２年(1927 年)から、ふたたびお坊様がすみましたが、その後はまた無住となりました。昭和 49 年(1978 年)、開山堂にあった無窓国師の像は京都の弘源寺へ移され、現在は臨川寺に安置されています。

○　現在の様子

そして、昭和 57 年(1984 年)にくりが古くなってこわれ、、開山堂もかわらが落ちるなど危険となったために取りこわされました。開山堂の跡地には、昭和 58 年(1985 年)に天龍寺の中の弘源寺によって「無窓国師生誕霊地」の碑が建てられました。その後、昭和 60 年(1987 年)、夢窓国師生誕史跡保存会が結成され。植樹や草刈り奉仕がなされています。（今の校地の南西すみの少し小高いところに跡地と碑があります。となりにある建物は行者堂で、輪聖寺の建物ではなく、今の校舎のあたりにあった建物を移したもので、東谷地区で管理をされています。）

また、平成 2 年～3 年にかけて、産湯の井戸の建物と案内板が完成し、平成 3 年(1991 年)、天龍寺のお坊様２人が出席して盛大な竣工式がおこなわれました。

開山堂

行者堂

開山堂の跡と生誕地の碑